

スペイン語における色彩語による名詞修飾¹⁾

岡見友里江

1. 目的

この論文では、スペイン語における色彩語による名詞修飾の特徴について、色彩語自体の普遍性・多様性と、スペイン語の形態・統語的特性に基づいて分析していく。人間が知覚する色は光の刺激であり、電磁波の一部の波長である。とするならば、種としての人間が認知できる色は人種や言語が異なっても同じはずだが、色の波長を切り取って言語化していく過程は言語によって異なる。さらにそれらの色彩語が名詞を直接修飾する方法も言語によって様々である。ここではスペイン語の色彩語による名詞修飾を取り上げて、その統語位置とその形態、さらにそれらと意味解釈との関係を分析していくが、その際、英語や日本語における色彩語の振る舞いと適宜比較する方法をとる。これにより、スペイン語の特性をより浮き彫りにすることができると思われる。

2. 色彩語の類型論

2. 1. 色彩語の言語的な普遍性と多様性

Berlin and Kay (1969) 基本色彩語彙 (Basic Color Terms) の研究以来、色彩語は主に言語の普遍性と多様性 (の範囲) を記述していこうとする言語類型論において発展してきた。そこでは Berlin and Kay (1969) の主張した、言語における色彩語の階層性による普遍性と、サピア=ウォーフの仮説が主張する言語相対性とが共存している。色彩語の示す普遍性と多様性の例としては、例えば日本語、英語、スペイン語には Berlin and Kay (1969) の示す基本的色彩語彙の階層性のうち、普遍性の高い順からすべて存在するが (白>黒>赤>緑>黄>青>茶>紫>ピンク>オレンジ>灰)、その統語的なカテゴリー化で違いが現れる。まず、形態論的に日本語では色を表すイ形容詞は四つしかなく (白い、黒い、青い、赤い)、それ以外は「～色」を伴うか (茶色い、黄色い)、(外来語も含めて) 名詞の形をとる (ピンクの花、紫の着物)。²⁾ さらに、黄色は Berlin and Kay (1969) によると青よりも色彩語の階層は高いはずだが、日本語の「黄色い」は形態的には「色」という語がはいっているため厳密には基本色彩語とはいえない。³⁾ 一方、英語やスペイン語では多くの基本的色彩語は形容詞の形をとるが、スペイン語では名詞との形態的な性数一致を持つという点で異なる (英: black pen, purple jeans, 西: camisas verdes, libros amarillos)。また、その解釈においても例えば日本語の青は英語やスペイン語よりも広く、緑も含んだ意味を持つという違いの一方で (晝信号、隣の芝は青い) (Stanlaw 1997)、直接的には色を表さない抽象名詞が色を修飾しても我々はその色を想像できたり (英: electric blue, 西: azul electrónico, 日: エレクトリックブルー)、ある色が言語によって引き起こすイメージが類型論的に同じであったり (英: black humor, 西: humor negro, 日: ブラックユーモア)、といった共通性も見られる。本稿で取り上げるのは、

このような普遍性と多様性を持った色彩語彙が、スペイン語で名詞を直接修飾する際の振る舞いを統語・形態・意味解釈の相関関係において記述することである。

2. 2. 色彩語の名付け機能と生産性

色彩語は先に見た言語間の普遍性と多様性の他に、名付け機能としての生産性の高さもその普遍的特徴のひとつである。多くの言語において、特にファッションなどの分野で色を表す語彙は日々新語が生まれ、それらのいくつかは語彙として定着するが大部分は短期間で用いられなくなってしまう。この色彩語の生産性の高さの背景には、色は五感のなかでも視覚に訴えるものであるということと、パッと一瞬で目に入ってくる色は何かを名付ける際に突出した特徴として認知されやすいということが考えられる。これまでに様々な分野でほぼ無限に色を表す新語が形成されてきているが、直接的に色を表す語彙、例えば花や果物、宝石だけでなく、そのものと色とを結びつける際に間接的な手法（メタファーや推論）などを用いなければならないような、想像的な色の名付けも数多く存在する。それらは、色とそのものが直接結びつかないがために、聞き手の想像力を促しよりインパクトを与えていると考えられる。Kütte and Venn (1995)では、抽象的な色よりも想像的な色のほうがより大きなアピールを持つと述べられており(“...imaginative color terms have greater appeal than abstract colors”, Kütte and Venn 1995)、さらに Kömürçü (2016) では実際の色と、それを表している語彙との関係がどんなに曖昧であっても、我々は問題なくそれらを結びつけることが出来るとしている(“... it is possible for us to associate color terms without any difficulty regardless of how vague the relationship between the reference and the color is”, Kömürçü 2016)。以下ではスペイン語、日本語、英語のより想像的、メタファー的な色彩語の例を挙げている。

- (1) a. amarillo van Gogh (Bosque 1990, 116); azul Picasso, rosa viejo, verde esperanza, gris cielo apagado (Corpus del Español NOW); rojo sangre, rojo pasión, verde manzana, blanco hueso, blanco pureza (Fábregas 2006)
- b. 京紫、芝翫茶、江戸鼠、利休茶（伝統色）；エレクトリックブルー、ロイヤルブルー、ショッキングピンク、グレージュ；ミッキーバーガンディ、ミニースウィートピンク（化粧品）
- c. whisper-light grey, midnight black, revolutionary red, Barbie pink, autumn orange (Kömürçü 2016); silk kimono, Cecile, chill pill, tremolo world (COCA: Corpus of Contemporary American English)

このように色を表す語彙は定着するかしないかに関わらずほぼ無限に生産していくことができる。それは、語という単位が、時に冗長的となる文や句が持ち得ない、直接的な名付け機能を持っているということであり、そのなかでも色彩語は人間にとって最も認知しやすい特徴を持っているからだと考えられる。⁴⁾ このような色彩語の生産性の高さ、名付け機能の多様さは時に、新語として定着するかどうかの過渡期にいくつかの形態的な曖昧性を引き起こすことがある。次にスペイン語の色彩語の特徴を見ていこう。

3. スペイン語の色彩語による名詞修飾

色を表す概念は Dixon(1982) による形容詞が表す 7 つの基本的意味タイプの一つであり (DIMENSION, PHYSICAL PROPERTY, COLOR, HUMAN PROPENSITY, AGE, VALUE, SPEED)、形容詞が生産性を持ち、開いたクラスをなす言語において色の品詞は形容詞がプロトタイプとなる。しかしながらスペイン語では、色彩語が名詞を直接修飾する際に、形態的には名詞と同じか(*camisas rosa*)、(日本語や英語でも同様であるが) 直接的には色を表さない名詞が、色彩語の修飾語として用いられることも多い (*verde esperanza, blanco pureza*)。ここでは、名詞を直接修飾する際の色彩語の形態を単純語と、二つ以上の併置形の二つのタイプに分け、それぞれ色彩語の形態的な流動性という点からその統語的・意味解釈的特徴を記述していく。

3. 1. 単純語による名詞修飾

スペイン語の色彩語が単純語の形容詞として現れる場合の形態的な特徴として、これらは主要部名詞と性数一致をする(2a)。一方、同じ色彩語でも名詞として現れる場合と、形容詞として現れる場合がある。(2b), (2c)では主要部名詞が複数形だが、色を表す *rosa* は性数一致をしているときは形容詞として(2b)、していない場合は名詞として現れている(2c)。しかしながらすべての色彩語が名詞と形容詞の二つの形態を許すわけではなく、Bosque (1991)では(2d)の *azul* が性数一致をしない名詞形として現れてくることが出来ないとしている。(2c)と(2d)の違いとその内部構造については、3. 3. で再び取り上げる。

(2) a. *la casa blanca / las casas blancas, el coche rojo / los coches rojos*

b. *dos corbatas rosas*

c. *dos corbatas rosa*

d. *dos corbatas {azules / *azul}* (2b-d) Bosque 1991, 114-115)

このように、色を表す概念は時に形容詞、時に名詞として用いられる。これは、色彩語の生産性の高さ、名づけ機能から、その色を特徴的に用いる物体そのものの名前(宝石、果物、花など) (*rosa, esmeralda, limón, etc.*)が色彩語として直接、名詞修飾に用いられることが多いこと、そして色を表す形容詞自体が形容詞の中でもより名詞的に近い振る舞いをするカテゴリーであることがその要因である。例えば、(3a)では前置詞 *de* の直後に無冠詞で *rojo* がでてきており、(3b)では形容詞 *azul* が直接、指示詞を伴っている。(3c)では動詞 *Hay* は補語として数詞 *dos* を伴う *azules* を複数形でとっている。さらに(3d)では冠詞と色を表す形容詞のみで、動詞 *prefiero* の補語となっている。この場合は、英語の例でもみられるように主要部名詞の *falda* が省略されていると考えられる。このようにスペイン語の形容詞は、主要部名詞と性数一致をすることで、その名詞自体を伴わなくてもそれに言及することができる。⁵⁾ これら

は色を表す形容詞に限らずスペイン語においては形容詞が形態的な性数一致によって名詞と同等の機能を果たし得ることを表している。一方、英語・日本語ではこのような形容詞の照応形の用法では、代名詞の存在が不可欠である。

(3) a. *María se viste de rojo.*

b. *Este azul no entona con el rojo.*

c. *Hay dos azules distintos en este cuadro.*

d. *De estas faldas, prefiero la negra.* (cf. *I prefer the black one* / 私はその黒いのがいい)

冠詞＋形容詞の照応的な用法以外では、色彩語が形容詞と名詞であいまいな振る舞いをする例が日本語や英語にもみられる。(4)では英語の *blue* が形容詞としても(4a)、名詞として動詞の補語としても現れてきている(4b)。また、(5)は日本語の例であるが、日本語では色を表す形容詞(白い、黒い、赤い、青い)は四つしかないが、それぞれ語尾の「イ」を取ればその語幹は名詞として振る舞うことが可能である。この場合、名詞を修飾する際には、他の色彩語と同様に助詞の「ノ」を介して「名詞＋ノ＋名詞」の形態をとる。さらに日本語の形容詞はそれ自体で活用する品詞であるため、色を表す形容詞はコピーラを介さずに述部になれるという、動詞に共通する特徴も持つ(5c)。

(4) a. *the blue sky*

b. *I like blue.*

(5) a. 私は赤が好きです

b. 赤の本、紫の煙、ショッキングピンクの服

c. 空が青い

以上のことから色の概念はスペイン語、日本語、英語において様々な品詞として具現化されやすい、流動的な概念であると言えるだろう。

3. 2. スペイン語の色彩形容詞の名詞性

ここではスペイン語の色を表す形容詞が示す名詞的な特性が、どのような統語的な帰結を持つかについて三つの例を検討する。まずひとつめは、名詞句内で色を表す形容詞は(特徴形容詞、比喩などを除いて)常に名詞に後置するということ(6a)、次に複数個の形容詞と共起する際には色を表す形容詞は他の品質形容詞よりも、(関係形容詞に次いで)名詞に近い語順にでること(6b)、最後に名詞と同様に、これらの形容詞は程度を表す副詞や比較級との共起ができないことである(6c)。この最後の点については、英語などの他の言語と同様に、品質形容詞の弁別的な特徴のひとつが段階性 (*gradability*) であるとするなら(Qurk, et al. 1985)、⁶⁾ 程度の副詞と共起しないということは(スペイン語だけでなく日本語や英語でも)色彩形容詞をより名詞に近いものに行っているといえるかもしれない。

(6) a. *los taxis amarillos* vs. **los amarillos taxis*

(Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española 2014, 以下 NGLE, 912)

(cf. los campos verdes vs. los verdes campos)

b. un coche italiano rojo redondo enorme elegante (Fábregas 2017, 15)

c. *los campos {muy / más} verdes, *la casa muy blanca

(cf. *la mesa muy {rectangular / redonda})

まず、(6a)では色の形容詞は多くの場合、名詞に前置されると非文法的になる。多くの品質形容詞が(意味の変化を伴うかどうかを別として)名詞の前にも後ろにも現れるのに対し、色を表す形容詞は、特徴形容詞(epíteto)である場合(los verdes campos, la blanca nieve)と、比喩的に用いられる場合を除いて(mi negra suerte, Real Academia Española 1973, 413)、通常は主要部名詞の後ろに現れる。ここで関係してくるのは、名詞に後置された形容詞が時にあいまいな解釈を許すのと反対に、名詞に前置する形容詞は主観的、非交差的、相対的などの意味のみを表すということである(Demonte 1991, 2008; Cinque 2010)。

(表 1)

前置形容詞	後置形容詞
主観的	客観的／主観的
非交差的	交差的／非交差的
非制限的 (説明的)	制限的／非制限的 (説明的)
内包的	外延的／内包的
相対的	絶対的／相対的

(cf. Demonte 1991)

色を表す形容詞が前置を許さないということは、これらが前置形容詞の表す解釈を持ちえないということ、つまり色を表す形容詞は非交差的な解釈、主要部名詞の意味に依存する相対的な解釈、例えば、Mary is a beautiful dancer が Mary dances beautifully と解釈されるような例など (cf. Bolinger 1967) を許さないということである。このことから色彩形容詞が名詞を修飾する際には(特徴形容詞や比喩、イデオロム的な表現を除いて)、その修飾関係の根底には叙述関係を含む関係節があると考えられる (la casa blanca = la casa que es blanca)。さらに興味深いのは、形態的に名詞から派生したとされる関係形容詞が決して主要部名詞に前置されないということである。Borer and Roy (2010) は、名詞と形容詞との間で紛らわしいのは関係形容詞と色を表す語であるとしており(p.85)、スペイン語ではより名詞的な要素が主要部名詞を直接修飾する際、主要部名詞に前置されないと言うことができるかもしれない。⁷⁾

(6b)は、品質形容詞が名詞句内に複数個現れた際の語順制限における色彩形容詞の位置である。このような形容詞の語順制限にはこれまで数多くの先行研究があるが(cf. Sproat and Shih 1991; Laenzlinger 2000; Scott 2002; Svenonius 2008; Cinque 2010; Ramaglia 2014; Fábregas 2017)、決定的なものではなく、Cinque (2010)では、その正確な語順と、それを決定している要因については、統語的な説明のほか、意味的、

認知的、または語用論的な原理が働いているとしている (p.122, note 3)。しかしながらある程度の傾向は各先行研究に共有されており、例えば(7a)の Sproat and Shih (1991)では色は、出自(provenance)に次いで名詞に近い位置に置かれている。さらに Scott (2002)や、ロマンス語においては Ramaglia (2014)でも、Color は(名詞の前後の違いにかかわらず) Shape と共に Nationality/Origin, Material に次いで相対的に名詞に近い位置に現れるとされている。

(7) a. quality > size > shape > color > provenance > Noun (Sproat and Shih 1991)

b. ...> Size > ...> Speed > Depth > Width > ...> Age > Shape > Color > Nationality/ Origin > Material > Noun (Scott 2002)

c. N > relational > color > shape > temporal > size > quality (Ramaglia 2014)

ここで Sproat and Shih(1991)のいう出自 (provenance)を表す形容詞と、Scott(2002)の Nationality/Origin, Material を表す形容詞を関係形容詞であると考え、色を表す形容詞は常に関係形容詞に次いで名詞に近い位置に現れるということになる。先に述べたように関係形容詞を名詞由来の形容詞であると仮定すると、⁸⁾ 主要部名詞に対する形容詞の語順は、より名詞的なものが主要部名詞の近くに現れるといえるだろう。

また、色に次いで名詞の近くに現れる、形状を表す形容詞は、時に色の形容詞と語順が交替可能となるが (Fábregas 2017)、それはこれらの形容詞も他の品質形容詞とは異なり、色の形容詞と同様、先の表 1 でみたような客観的、絶対的、交差的な意味を持ち、名詞に前置されないという点で (*la redonda mesa, *el rectangular triángulo)、共に、より名詞的なカテゴリーであるからだと考えられる。さらに(6c)の示すように色と形状を表す形容詞が、名詞や関係形容詞などと同様に程度の副詞や比較級を取れないということも、これらをより名詞に近いカテゴリーにしている(*muy casa, *muy redondo, *bastante rectangular)。Demonte(1991)はこれらの程度の副詞と共起せず、段階性を持たない形容詞(mamífero, azul, enfermo, navegable, desnudo など)を絶対形容詞 (adjetivos absolutos) と呼んでいる。ただし、付け加えておかなければならないが、色彩形容詞には、接辞等で色のニュアンスを付加するもの(8)や、程度の副詞を許す例も数多くある (9)。この場合は、関係形容詞に程度の副詞がついた例 (una cosa muy Española / muy japonesa)と同様に、典型的なスペイン人、とても日本的、典型的な赤色、などといった、ある種のプロトタイプを仮定し、それらへの接近の程度を表していると考えられる。⁹⁾

(8) a. verde amarillento, amarillo verdoso, azul blancuzco

b. bluish gray, reddish brown, yellowish green

c. 緑がかった黄色、白みがかった青

(9) muy verde, ligeramente verde, verdoso (NGLE, 916)

以上、この節ではスペイン語の色彩形容詞が単独で主要部名詞を修飾する際の、名詞的な振る舞いを見てきた。次節では色彩語が並列された際の修飾関係について検討する。

3. 3. 色彩語の並列形とその修飾関係

最後に、色を表す語と、それを修飾する語が二つ（以上）併置で現れるタイプについて、その形態的特徴と、主要部名詞との修飾(統語)関係について検討していく。いくつかの語彙を併置して色を表す語彙は、日本語や英語でも生産性が高いが、大きく分けると色を表す語を修飾する要素が形容詞の場合と(10a)、名詞(10b)の場合がある。さらに二つ以上の修飾語が連なる例もみられるが(10c)、接続詞なしで現れる最大のものは、主要部名詞が基本色彩語彙であれば4つ(10d)、それ以外なら3つが最大である(10e) (Fábregas 2006, 107)。NGLE では、色彩語が二つ並列される場合、その二番目の要素は名詞と形容詞の二重のカテゴリー化を許すとしている(NGLE, 38)。

- (10) a. gris oscuro, azul marino, negro mate, rosa pálido, rojo oscuro, blanco brillante, amarillo limón
b. gris perla, azul turquesa, rosa coral, rojo cereza, verde esmeralda, verde hoja, verde musgo
c. verde claro manzana, gris cielo apagado, negro tirando a gris, azul intenso de Prusia
d. azul topacio rosado intenso, verde botella amarillento brillante, rojo pasión anaranjado oscuro
e. violeta rojizo oscuro, naranja amarillento pálido, ciruela verdoso brillante

((10d), (10e): Fábregas 2006, 107)

ここで取り上げる問題は、色を表す語とその修飾語はどのような統語関係を持つのか（例えば gris と oscuro、gris と perla との関係）ということである。まずは3. 1. で言及した Bosque (1990)の例を出発点とする。

- (11) a. Dos corbatas rosas
b. Dos corbatas rosa
c. *Dos corbatas azul
d. Dos corbatas azul claro

(11a)では rosas は名詞 corbatas と性数一致しているため形容詞と考えられるが、(11b)では単数形となっているので名詞と考えられる。一方色を表す azul は、本来形容詞なので、単独では名詞として振舞うことはできない(11c)。rosa が形容詞としても名詞としても振る舞えるのは、それが指示する物体（バラの花）を持ち、我々も色と指示物とを結び付けやすく色彩の解釈が容易であるのに対し、(11c)の azul には名詞として指し示す実体がないため、（性数一致のない）名詞としては解釈できないからだ。Bosque (1990)は述べている。ところが claro という修飾語を伴うと、azul は corbatas と性数一致をしなくても文法的となる(11d)。ここで、(11d)の azul の前に del color が省略されており、それゆえ azul は color を修飾しているので男性単数形なのだと考えることも可能であるが、Bosque (1990) がいうように、もしスペイン語では品質形容詞が品質形容詞によって修飾されることはないとするならば(p.115)、azul の品詞と、claro との関係とが問題となってくるだろう。

Bosque (1990)の説明は以下の通りである。まず(11d)の構造の可能性を(12)のように提示し、ここでは名詞の azul に形容詞の claro が後続し全体が名詞句を成し、それと主要部名詞の dos corbatas が同格の構造を成している、と分析している。

(12) Dos corbatas [SN [N azul][SA claro]]

(SA = sintagma adjetival, SN = sintagma nominal) (Bosque 1990, 115)

Bosque (1990) は(12)では azul が形容詞ではなくて名詞であり、全体として azul claro は名詞句として、主要部名詞の corbatas と同格を成すとしている。しかしそうだとすると、単独では名詞になり得ない azul が claro を伴うとなぜ名詞化するのだろうか。この点については、具体的な説明はなされていない。本稿でも確実な根拠は提示できないが、先にみたように色を表す形容詞がそもそも名詞との間で揺れるカテゴリーであり、その境界があいまいであるということ、さらに色の意味を細かく補足、指定する修飾語を伴うことで聞き手のイメージがわきやすくなり、それに伴って指示性があがって名詞に近くなるのではないかと考えられるだろう。

(12)のような同格の構造は、色を表す語が修飾語と並列される、他の多くの例にも拡張できると思われる。例えば(10a)は以下ようになる。

(13) la [SN [N camiseta] [SN gris perla]]

(13)ではまず、共に名詞である gris と perla が同格として名詞句を形成し、その名詞句がさらに名詞 camiseta と同格を成している。この意味で(13)は二重の同格構造を取っている。

同格とは名詞（相当句）を文法的に等価な他の名詞（相当句）と併置し、その記述や説明を補う関係のことであり、その二つのメンバー間の関係は叙述関係(*la relación predicative*)、または分類的同格(*las aposiciones clasificadores*)となる(Bosque 1990, 116)。色彩語の同格の場合は叙述関係というよりは、色彩語に様々なニュアンスを付加してさらに詳細な色味を表していくという点で、分類的な同格といえるだろう。同格の構造をとることで、分類的になり得る語彙は、Bosque (1990)の述べているように、色彩語のほかにスタイル、銘柄、固有名詞なども可能である(*sillones Luis XV, coches Renault*)。これらの語が分類を可能にするのは、それらが後続する主要部名詞が属するクラスの下位範疇を提供するからと考えられる。つまり、gris の下位分類として perla が機能しているのである。このような分類のための下位範疇の提供は、名詞を修飾するというよりもそれを下位分類する、分類関係形容詞(*adjetivos relacionales clasificadores*, Bosque y Picallo 1996)に近い機能を持つ。先に語順において見たように、関係形容詞は形態的には形容詞だが、その由来、起源は名詞であり、ちょうど名詞と形容詞との中間の振る舞いをする色彩語とは共通する振る舞いをする。色彩語に複数の要素が併置されて出てくる場合は、その後続の要素の品詞が名詞であれ形容詞であれ、主要部名詞の下位範疇を示すという機能を果たしているのである。

4. まとめ

本稿ではまず色彩語自体が持つ生産性とそれによる名づけ機能を概観し、この生産性の高さから、色彩語が形容詞と名詞とで流動的であるということを見た。次にスペイン語の色彩語の例を検討し、色彩語の名詞性がどのような形態・統語的な帰結をもたらすのかを議論し、最後に色彩語が主要部名詞と結ぶ統語関係を分類的同格として検討してきた。今後の課題としては、これらの同格関係を結ぶ色彩語が名詞句内で、主要部名詞に対しどのような位置を占めるのかについて、名詞句全体の構造をより詳細に仮定して提案していきたい。

註

- 1) 本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 C 課題番号 20K00589）の助成を受けた研究成果の一部である。
- 2) 古代日本語の色名のうち、赤（明）、黒（暗）、白（顕）、青（漠）といった色の明暗を表す語彙が日本語の色彩語の起源であり、これらが現在の日本語で 4 つの形容詞の形をとっている（沖森 2010）。さらに言えば、日本語の色彩語で反対色（白－黒、白－赤、赤－青）を持っているのもこの四つの色彩形容詞のみであり、これらの点からもこの 4 つの色彩形容詞が他の色彩語とは区別すべきものであることがわかるだろう。
- 3) Berlin & Kay (1969) の基本色彩語の定義としては①unanalyzability, ②productivity, ③morphological complexity を挙げている。
- 4) cf. “Colors have inherent attractions; they play an important role in people’s lives both emotionally, psychologically and aesthetically.” (Kömürçü 2016)
- 5) このような冠詞と形容詞のみで名詞に言及する形式は、しばしば形容詞の名詞化とみなされてきた (Bello 1847, 1984; Alarcos Llorach 1994)。しかし実際にはこれらは照応形として文脈を常に要求する形式である。つまりこれらは形容詞が名詞化したのではなく名詞の省略という統語的なプロセスであり、文脈を要求しない、純粋な形容詞の名詞化(ex. *Para el colombiano, es una verdadera dicha sacar pasaporte* (NGLE, 939))とは区別するという考えが現在では主流である。
- 6) Quirk et al. (1985) の挙げた形容詞判別の 4 つの基準は 1) 限定用法, 2) 叙述用法, 3) very によって修飾されるか, 4) 比較変化をするか、である。形容詞はこれらの基準をいくつ満たすかで、「模範的」なものから「周辺的」なものまで段階性をなしている。
- 7) ただし関係形容詞がすべてコピュラ動詞を介した述部になれるというわけではない(**Esta máquina es electrónico, *Este trabajo es manual*)。これらの違いは Bosque y Picallo (1996) の関係形容詞の分類を参照。
- 8) “(Los adjetivos relacionales) expresan cierta relación particular entre las propiedades del sustantivo modificado y las correspondientes a la base nominal de la que el adjetivo se deriva o con la que se asocia léxicamente” (NGLE, 914)
- 9) 日本語においては、口語であるなら「めっちゃ赤い」が可能であるかと思われるが、その他の絶対形容詞に関してはまだ容認度にばらつきがあると思われる(「めっちゃ丸い」「めっちゃ四角い」「めっちゃ哺乳類」)。ただし、今後はこれらの形容詞にも相対的な解釈が可能になることもあるのかもしれない。

引用文献

- Alarcos Llorach, Emilio. 1994. *Gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe.
Baker, Mark. 2003. *Lexical Categories: Verbs, Nouns and Adjectives*. Cambridge: Cambridge University Press.
Bello, Andrés. 1847. *Gramática de la lengua castellana*. Madrid: EDAF.
Berlin, Brent and Paul Kay. 1969. *Basic color terms: Their universality and evolution*. California: University of California Press.

-
- Bolinger, Dwight. Adjectives in English: attribution and predication. *Lingua* 18, 1-34.
- Borer, Hagit and Isabelle Roy 2010. The name of adjective. In Patricia Cabredo Hofherr and Ora Matushansky (eds.), *Adjectives: Formal analysis in Syntax and Semantics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Bosque, Ignacio. 1990. *Las categorías gramaticales*. Madrid: Editorial SINTESIS.
- Bosque, Ignacio y Carme Picallo. 1996. Postnominal adjectives in Spanish DPs. *Journal of Linguistics* 32, 349-385.
- Demonte, Violeta. 1991. *Detrás de la palabra, Estudios de gramática del español*, Madrid: Alianza Editorial.
- Demonte, Violeta. 2008. Meaning-form correlations and adjective position in Spanish. In Louise McNally & Christopher Kennedy (eds.), *Adjectives and Adverbs: Syntax, Semantics and Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. 1982. *Where have all the adjectives gone?* Berlin: Mouton.
- Fábregas, Antoni. 2017. The syntax and semantics of nominal modifiers in Spanish. *Borealis; An international Journal of Hispanic Linguistics* 6-2,1-102.
- Kütte, Erich and Axel Venn. 1995. *Marketing mit Farben*. Kampen: Dumont.
- Kömürücü, S. 2016. Color terminology in written fashion discourse. In Paulsen, Geda et al. (eds.), *Color Language and Color Categorization*. Cambridge: Cambridge Scholas Publishing.
- Laenzlinger, Christopher. 2005. French adjective ordering. *Lingua* 115, 645-689.
- Okami, Yurie. 2016. On the fluidity of the Color words: The alternation of color adjectives and color nouns in Japanese. In Paulsen, Geda et al. (eds.), *Color Language and Color Categorization*. Cambridge: Cambridge Scholas Publishing.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ramaglia, Francesca. 2014. The syntax and semantics of attributive adjectives in Romance. *Lingue e Linguaggio* XIII, 2. 00.131-158.
- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española. 2009. *Nueva gramática de la lengua Española*. Madrid: Espasa Libros.
- Scott, G.-J. 2002. Stacked adjectival modification and the structure of nominal phrases. In G. Cinque (ed.), *Functional Structure in DP and IP*. Oxford: Oxford University Press. pp. 91-120.
- Stanlaw, James. 1997. Two observations on culture contact and the Japanese color nomenclature system. In C. L. Hardin & C. L. Luis Maffi (eds.) *Color Categories in Thought and Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

コーパス

Corpus del Español NOW (<https://www.corpusdelespanol.org/now>) (最終閲覧日 2021 年 4 月 27 日)

Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>) (最終閲覧日 2021 年 4 月 27 日)